

# Accounting, Arithmetic & Art Journal



The **PACIOLI SOCIETY JAPAN**

1995 . 11

## 第七回フォーラム開催のお知らせ

平成7年11月18日(土)午後8時から拓殖大学文京キャンパスにて、徳橋曜先生(富山大学)をお迎えして「中世末期の公証人と商人文化についてー「スママ」の生まれた文化的環境」ご講演をいただきます。あけぼの期のルネッサンスや公証人制度と商業帳簿の形成に関する貴重なお話をお伺いできるものと期待しています。ひき続いて開催する懇親会にも奮ってご参加ください。

## ハーウッド簿記・会計学文献コレクション

6月のとある土曜日、大森駅からタクシーで5,6分のところにある洋書の老舗・丸善株式会社の平和島倉庫に招待されました。案内されたのは、近代的な流通倉庫の一角にあるスチール製書棚(6段)7連分にぎっしり詰まった古色蒼然とした書籍類1,321冊でした。これはニューヨークのハーウッド公認会計士事務所(Herwood&Herwood)が所蔵していた15世紀から19世紀後半までに出版された簿記・会計の原本コレクションです。19世紀後半から20世紀の初めにかけて収集されたものと、1938年にハーウッド蔵書目録が公刊された後に追加された文献とを合わせて、1,320点が収集されました。

The Herwood Library of Accountancy. A Catalogue of Books printed between 1494 and 1900 in the Herwood Library of Accountancy, Published by Herwood & Herwood Certified Public Accountants, 1938

パチョーリ著「スママ」に始まり、ダリエンテ、カルターノ、マンツォーニ、ピエトラ、ステフィン、ダフォルネ、コトルリ、コリンズ、フローリ、ド・ラ・ポルト、ハットン、イルソン、デフォー、サヴァリ、デグランジェ、ケリー、ジョーンズ、クロンヘルム、そして福沢諭吉訳「帳合之法」や馬耳蘇氏「記簿法」も含まれていました。

1494~1710年に刊行された「スママ」を含む80冊、1701~1850年に刊行された735冊、1851~1910年に刊行された505冊、それに丸善書店が保有していたパチョーリ著「ディヴィナプロポルツィオーネ」(1504)一冊を追加して1321冊の膨大なコレクションとなっています。これらが散逸せずに今日あるのはハーウッド未亡人がボルチモアの大学図書館に預けてあったからとのことで、二度とこのように集大成されたコレクションは市場に現れなからうと思います。それだけに日本の研究機関が一括して購入し、会計史研究の資と供されることを切に願うものです。



# インクナブラとしてのパチョーリ『スママ』

慶応義塾大学 ひがしだ まさよし  
東田 全義

## 1. インクナブラについて

私が始めて洋書を取り扱う仕事に就いたのは30数年前であった。主に商学部の図書であった。「パチョーリ」という会計学の古典が存在することを知ったのもその頃であった。

しかし「パチョーリ」の実物を見たわけでもなければ、複製物が手元にあったわけでもない。そのうち仕事が変わったこともあって「パチョーリ」とは疎遠な期間が長く続いた。

日本が高度経済成長時代に入り、あちこちの大学図書館に高価な稀覯本が架蔵されたというニュースを聞くようになった。その一つが日大商学部図書館に入ったパチョーリ『スママ』であった。ところが、その実物を見る機会もないまま、さらに時は流れた。たまたま『スママ』が市場に現われ、慶応義塾図書館へオファーされた。受入れ側としても、高価な商品であるから「もの」としての確認をしなければならない。つまり書誌学の発動である。その時『スママ』がインクナブラであることにはじめて気付かされたのである。

『スママ』受入れ後も『スママ』書誌学は続けられ、自分でも納得できる結果を得るまでには、一年ほどの月日を必要とした。もちろんそればかりに掛りきりというわけではなく、日常業務の合間を見ての調査であった。私にとっては、インクナブラ書誌学の最初の経験でもあった。

Incunabula という語は、西洋書誌学をやる者にとっては周知の用語であるばかりでなく、一種の憧憬を抱かせる語感をもっている。本来ラテン語から造語された用語であって、このままラテン語



綴りでは産衣という意味もあるが、揺り籃(cunabula)の中にある状態という合成語と見るのが正当なように思われる。書誌学用語としての incunabula の日本語訳は、揺籃期本または初期刊本であるが、定義に近い訳語として15世紀刊本という表現も使われている。つまりグーテンベルグが聖書を活字印刷した1455年ごろ以降、15世紀中に印刷された書物のことである。グーテンベルグが印刷術を発明してから、近代的印刷術に成長するまでの印刷術の揺籃期というわけである。この当時の印刷職人が作り上げた書物は、現代のような情報の媒体というよりは工芸品であった。そんなことのためであろうか、西欧の図書館では、何冊のインクナブラを

持っているかでもって、その図書館の格式が決まったと言われている。

因みに英国図書館は約12,000点を所蔵しており、わが国で最大のインクナブラ所蔵館である天理図書館には約80冊がある。

50年にも満たないインクナブラ時代、書物印刷として終始一貫した特徴が持続していたわけではない。たしかにその初期には美術品的志向が強かったものの、だんだんに商業的意図が現れるようになったと言われている。ルネッサンスによって商業都市が発達した時代でもあった。同時に宗教改革の時代でもあり、地理上の発見時代でもあった。まさに時代が大量の情報媒体を要求していたのである。パチョーリ『スママ』刊行の2年前に、コロンブスのアメリカ大陸発見があった。アメリカ大陸発見とこの数学書刊行とにどんな因果関係があるのかは解からない。その数学書の中の一節が、複式簿記についての最初の印刷文献となった事情についても、私の考証の外にある。インクナブラ書誌学の使命は、初期の印刷技術の有様を今に伝えてくれる物的証拠として、その形態を明らかにすることにある。『スママ』は初版刊行30年後に、形態も本文もそのままの「第2版」が、同じ印刷者名のもとに印刷された。しかしそれはインクナブラではない。ただ、それなりの印刷技術の変化あるいは発達が認められる、印刷史の興味にある事例ではある。

## 2. 『スママ』の形態特性

### 標題頁(title page)とコロフォン(colophon)

インクンナブラには標題頁がないのが普通である。近代の書物の標題頁には少なくとも標題・著者名・出版地・出版者・出版年が印刷されているものである。『スママ』の冒頭頁には、確かに標題が印刷されている。



(図1 初版表題頁)

(図1 初版標題) やや大きめの活字で標題があり、その下方に全巻の目次がある。書物の看板である標題頁としては地味であるばかりでなく、出版地・出版社・出版年といった標題頁の要件が満たされていない。一方第2版の標題頁(図2)を見ると、いかにも表題頁といった体裁を整えている。まず組紐をデザインした縁飾り(Frame)が目につく。そして大きく標題が印刷されている。

これを原書で見ると、現在は剥落したり褪色して分かりにくいのであるが、金色で印刷されていたと認められる。標題の下方逆三角形にレイアウトして印刷された文章中に出版地、出版社、出版年がある。出版地は初版のヴェネツィアとは違うトスカーノになっていて、そこが景勝の地であることを描写した文章もある。明らかに標題頁を意図して作られた頁である。

初版の標題頁には印刷されていない出版事項は、巻末のコロフォン(図1 初版標題頁)中にある。コロフォンとは、印刷が終了したとき、この書物が成立した事情について、印刷者が書く「後書き」のことである。しかし『スママ』のコロフォンは、印刷

者パガニーノが書いたのではなく、パチョーリが書いたのではないかと思われる。それは次のように判読できたからである。

……慎重な男、ブレッシャ出身のパガニーノの費用と勤勉と、そして印刷工房とを使用して、すぐれた統治に恵まれたヴェネツィアというすぐれた都市において、そこでは、その恩恵に浴している規則のもとに、近々10年間はこの町の他の誰もこれを再版することはできず、この町で印刷されたものは、他のどこへも持出すことができない。我が泰平の年1494年11月10日に、この町のきわめて平穩な統治者であるところのヴェネツィア人ウグスティノー・バルバディオ様によるきわめて幸せな支配のもとで、フランチェスコ修道会士にして、また聖なる神学の教授であるところの、サンクト・セポルクロ出身のルカス・デ・ブルゴが、自分の貧しく未経験な才能を哀れみつつも、やっと“Summa”を編さんした。そしてまた昼も夜も印刷職人を手伝いながら、申出て手づから校(図2 第2版標題頁)正をした。

ここでパチョーリは、自分を Lucas de Burgo と称んでいるように、『スママ』の中では Pacioli という名は一語も表れない。それでもこの本の著者は Pacioli であることは、はやくから証明されていた。そのことについてはここでは触れない。

### 折丁記号(signature)

この時代の造本を特徴付けているものの一つに折丁記号がある。

標題頁裏の下方に図(図3)のような記述がある。これは register といわれているもので、(図3 register)

Tabula. a.b.c.d.e.f.g.h.i.k.l.m.n.o.p.q.r.s.t.u.v.y.z.aa. Omnes sunt quater  
 ni preter p qui est quinternus. Et AA qui est septernus.  
 Registrum Geometrie: quere in ultima carta totius operis.  
 M<sup>o</sup>:cccc<sup>o</sup>:xlvi<sup>o</sup>:xx<sup>o</sup>. Nouemb<sup>o</sup>:ris, vinctijs

書誌学用語としての日本語訳に定訳がまだない。印刷された全紙(sheet)を折って、それをどういふ順序で配列するかを、印刷者が整本者に指示したものと今では理解されている。現代の書誌学は、それを利用して書物の形態を確認しているのである。それを読んで見よう。Tabula(折丁記号表)の次ぎに印刷されているアルファベットは、『スママ』第一編中で使用されている折丁記号の一覧とその順序である。小文字のabcdから始まって、大文字AAで終わっている。その次ぎのラテン語は次のように読める。Omnes sunt quaterni(すべて4枚重ねの二折である)、preter(except), (rumの省略符号) qui est quinternus (は5枚重ねの二折である)、Et AA qui est septernus(そ



(図2 第2版表題頁)

してAAは7枚重ねの二折である)。これを書物の本体で確かめると、(図4)の右下欄外に小文字 a が印刷されているのが見える。次の紙葉の同じ位置に aii が印刷されている。そのようにして aiiii まで確認できる。その次の4葉には何も無い。つまり全紙4枚が二つに折られて8葉 (leaf) で一丁 (quire) を構成している。これを a 丁という。この a 丁の5枚目から8枚目までには、記号が印刷されていなくても、書誌学上では a5 ~ a8 であると了解している。同様にして b1~b4 と [b5 ~b8] を b 丁と確認できる。そして最後の二つの記号は、例外として、~~8~~丁 10 葉、AA 丁 14 葉を



(図4 初版A型)

確認できる。以上は『スムマ』第一編の折丁記号のことであって、

第二編幾何学の register については、その次の行に *quere in ultima carta totius operis* (全巻の最終紙葉に訊け) とある。このようにして本来は印刷者から 整本者へのメッセージである register を読むことによって、われわれは書物の印刷・造本の構造を知ることができるのである。

### 省略符号

図1と2の標題を見比べると、Summa の綴り字が違っていることに気付く。初版では m が1文字になっている。その代りに m の前の u の上に、スペイン語の tilde のような符合がある。これが省略符合である。この符合の次に m または n が1文字省略されていることを意味している。また図3の折丁記号表の中にも省略

符合が転用されている。z の次にある符合は、図1の標題の中でも使用されていて、図2のそれは et (=and) となっているように、現在でも使われている唯一の省略符合である & の古形である。図3の et 記号の次ぎにある疑問符に似た符合は con の略、その次ぎの数字の 4 に似た符合は、先にも述べたように rum の略である。これらの記号が文中で使用されていけば、そこは正綴に読み替えるのである。省略符合の種類には、まだ他にもかなりの事例が知られている。印刷術発明以前の写本時代からあったのであるから、その時代では速記的意味があったのであろう。ところが活字印刷の時代になっても使用されたのは何故であろうか。現代の吾々がワープロなりタイプライターで欧文を書く時に、行末を揃えるのに苦心をしている。初期印刷時代にも行末が揃っていない事例はある。おそらく、版面の美観を損なう行末の不揃いを調整するために、省略符合を利用したのではないかと考えられている。

### 紙葉番号(leaf-number)

『スムマ』の本文部分には、紙葉番号が付されている。つまり各紙葉の表にのみ順序番号が付されている。まだ頁付けの技術はなかったのである。これも整本者の便のためであって、読者の便のためではなかったようである。それというのも、目次にこの番号を利用して指示が与えられているわけではないからである。第一編と第二編とは独立した番号付になっているため、第二編の1~76番は、第一編にも同じ番号がある。また番号付の間違いや脱落が17箇所ある。幸いにして、後で述べる「簿記論」の引用表記がこれらの変則番号付と抵触することはない。

『スムマ』の形態特性について説明すべき事が残っているのであるが、さし当たって以下の「簿記論」引用表記の説明には関係しないので、ここでは省略することにする。

## 3. 「簿記論」の引用表記について

上に述べたような『スムマ』の書誌学的特性のため、現代書のように「簿記論」は『スムマ』の 000p~000p というような表記法ができない。そのために会計学の専門家の人達が引用表記に苦慮していることがわかる。その一例が「197 丁裏から 210 丁裏まで」である。

この記述によて『スムマ』の原書なりファクシミリ版の中に「簿記論」の位置を確認できるのであるから、一概にまちがっているとは言えないのかも知れない。もう一つの表記例として「199 フォーリオから 210 フォーリオまで」がある。この表記法でも『スムマ』を繰っていけば「簿記論」に到達はできるが、書誌学的表記法としてはあきらかに間違っている。上の二つの引用表記は会計学の長老先生の論文から採録したもので、敢えて執筆者名をあげることはせずに、書誌学的表記法に改めてみよう。



(図5 初版B型)

この二つの表記法の難点は、紙葉単位の日本語訳表現にある。まず「197 丁裏」とある丁であるが、丁とは和本袋綴の丁を leaf の訳語に当てたものであろう。その限りでは大きな誤りとは言えないが、西洋書誌学の折り丁と紛らわしくなっている。それが 197 という紙葉番号と結びつくことによって、西洋書誌学の表記法から見て誤解を招く表記となっている。上でも述べたように「簿記論」の引用表記に紙葉番号を使用しても支障は起らないのであるが、『ススム』中の他の論文の引用表記には使用できない場合も起りうるのである。なぜなら、『ススム』には番号付けの誤りや脱落があり、また第2編「幾何学」の番号付けはすべてダブっているからである。一般に、初期印刷本に番号付けがある場合にも、このような間違いが多いため、書誌記述としては機械的に巻頭の紙葉からの順番で示す事になっている。『ススム』には標題(図5 初版B型)紙を含めて番号付がない前付8枚があるので、「197 丁裏」を大英図書館の記述法で示すと 205<sup>v</sup>となる。つまり巻頭から 205 枚目裏の意味である。しかし、紙葉番号を使用した表記法もないわけではない。フランスの書誌記述の中に Fc という記号を見かけることがある。これは、Feuillet chiffre (=numbered leaf) の略号である。「簿記論」に限り紙葉番号でも支障がないのであるから、“Fc197<sup>v</sup>”という表記も可能と言えよう。

日本語に訳すと「番号付紙葉 197 番裏(v=verso)」である。もう一つの表記例「199 フォーリオから 210 フォーリオまで」はよく分からない。まず「フォーリオ」という単位であるが、おそらくイタリア語 foglio を英語 leaf の訳語としたものであろう。書誌学用語としての leaf のイタリア語は carta であるから、イタリア語で番号付紙葉とは numerato carta であり、略して nc とする。「簿記論」冒頭のパチョーリ像の首字がある箇所「番号付紙葉 198 番裏」をイタリア語の書誌記述にすると“nc198<sup>v</sup>”となり大英図書館の記述法では“206<sup>v</sup>”となる。書誌学的な折丁記号による表現「<sup>v</sup>6 枚目裏」は“6<sup>v</sup>”となる。

ただしこの折丁記号「<sup>v</sup>」は、現代の活字印刷にするとなるとむづかしい状況となる。その点、大英図書館の記述法は活字印刷にも便利な方法といえる。しかし、それを書く人も読む人もその約束事を知っていなければ理解できない。そこで「簿記論」引用表記については、紙葉番号を使用しても支障が起きない状況に便上して、誰にでも分かりやすい表記として「番号付紙葉 198 番裏から 210 番裏まで」=“nc 198<sup>v</sup>~ 210<sup>v</sup>”とすれば、書誌学の専(図6 初版C型)門家でなくても、また国際的にも理解されるのではないのでしょうか。

#### 4. 初版の変形3種について

『ススム』がインクナブラであったから書誌学的意欲がかきたてられたかという、どうもそうではなかった。1494年に刊行された『ススム』初版には、変型が存在しているらしいということを知ったことに、その強い動機があったように思われる。その変型の実態を究わめてやろうとすることは、書誌学としてきわめて正当な行為であった。その結果の概要を述べると、『ススム』全巻 316 葉からなっているうち、32 葉が別の活字でもって 2 度までも刷り直されているのである。なぜそんなことが起こったのか、そしてそのことによって『ススム』が文字で伝えようとしていたこと以外に、現代のわれわれにどんな事実を伝えようとしたのであろうか。結論は不明である。このことについては、『ススム』刊行 500 年ということで書いた拙稿「パチョーリ『ススム』の書誌学上の謎」(雄松堂書店書物雑誌『ピヌス』37)に愚考を述べてあるので参照されたい。ここではその変型が一目でわかる、番号付紙葉 [1 番] 表 (alp<sup>r</sup>) の図を掲出しておく。図4は原版、図5と6はその変型である。関心ある人によってこの謎が解明されることを願うものである。

(平成 7 年 3 月 25 日 千葉商科大学瑞穂会館にて講演された原稿に加筆したものである。)

わたくしども日本パチョーリ協会はルカ・パチョーリの功績を偲び会計史、数学史、美術史などに興味を持たれる方々の研究と親睦を目的とする会合です。興味のある方は、世話人にお声をかけ



てくださればご案内申し上げます。

世話人：岡本治雄・片岡泰彦・鈴木一道・佐々木重人・三代川正秀

監 事：種田勝正・松井隆幸

The **P**ACIOLI **S**OCIETY **J**APAN

---

日本パチョーリ協会 〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14 拓殖大学 商学部 三代川 研究室 TEL.03-3955-8783  
The Institute for Management and Accounting/Takushoku Univ. Miyokawa Office